

平成31年2月6日

秋田県文芸部会報

部会長 今井 智幸

文芸と、様々な表現活動に

中高生世代の活躍が目覚ましい。フィギュアスケートGPファイナルで、平昌五輪金メダリストのザキトワを破り優勝した紀平梨花選手（16）。卓球ワールドツアー・グランドファイナル男子シングルで、窮地でも動じぬ精神力を発揮し初優勝した張本智和選手（15）。公式戦 29 連勝、棋戦優勝最年少、公式戦通算 100 勝最速など、次々に記録を塗り替えている棋士の藤井聡太七段（16）。そして、3年連続で「12歳の文学賞」を受賞し、ベストセラーとなったデビュー作『さよなら、田中さん』に続き、最新作『14歳、明日の時間割』を書き下ろした中学生作家の鈴木るりかさん（15）。

世界のトップアスリートを目指すだけでも険しい道のりが待つスポーツの世界、命を削る勝負の世界と言われる厳しいプロの将棋界、たとえ文学賞を受賞しても作品を出し続けるのが難しい小説の世界。そんな世界で、中高生世代がのびのびと溢れる才能を発揮し続ける姿は、頼もしい。スポーツや将棋も、ある意味で表現活動である。トップアスリートやプロが集う勝負の世界で、勝ち続けるのは難しい。敗戦から学び、立ち直り、自己の可能性に挑戦し続ける姿に、人は心を動かされる。創作も才能だけではもたない。作家として、日頃から創作意欲がかき立てられ、創作活動を支えてくれる様々なことを大切にしているはずである。

「私にとって小説とは、言葉が一つ一つ連なって生み出されてゆく意味と音との響き合いです。行間にあふれだしてゆく空気感であり、それが発酵して香り立つ匂いなどの集合体です。」そして、「自分とは何者かを知るには世界を見なければならない。私という存在はその関係性で成り立っている。」とも。これは、『黄金を抱いて翔べ』、『リヴィエラを撃て』、『レディ・ジョーカー』、『太陽を曳く馬』、『土の記』等、数々の名作を出し続けている作家高村薫の言葉である。

現実世界は、人間や自然、時代も含め、複雑で見え方、捉え方は多様で様々である。その分、言語表現の世界は、奥が深く広い。だからこそ、文芸をはじめ様々な表現活動に、創作であれ鑑賞であれ、なんらかの形で親しみ、関わり続ける限り、人は生きる力を与えられ、より豊かな生を生きることができるはずである。